

レファレンス コーナー

トルコを知るために ——二〇〇三年 トルコ年を迎えて

半田真奈美

二〇〇二年サッカー・ワールドカップは、トルコという国をぐっと身近なものにした。トルコはそれまで私たち日本人にとって、さほどなじみのある国とはいえなかったろう。日本で暮らすあるトルコ人は、日本人からたびたび「トルコ語ってあるんですか?」と聞かれるといて嘆いていた。トルコ語は、ある。もちろん。トルコ語は日本語と同じウラル・アルタイ語族に属し、文法・語順が日本語に近いため日本人には学びやすい言語といわれる。

あなたがもしワールドカップ・トルコ代表選手のイルハン・マンズズにトルコ語で誕生日のお祝いのメイ

ルを送ってみようと思つたら、水野美奈子著『水野美奈子のトルコ語入門』（大学書林 出版年不明）、および、大島直政著『エクスプレストルコ語』（白水社 一九八八年）でトルコ語に挑戦してみてもどうだろう。

トルコといえばイスタンブールを思い浮かべる人が多いだろう（ちなみに首都はアンカラ）。ボスボラス海峡によってアジアとヨーロッパに分たれているこの街は、オスマン帝国のスルタン、メフメット二世によって一四五三年に征服され（当時はビザンツ帝国の首都）、その名をコンスタンティノープルからイスタンブールへと改めた。鈴木董著『図説 イスタンブール歴史散歩』（河出書房新社 一九九三年）は、ビザンツ帝国からオスマン帝国を経て現代にいたるトルコとイスタンブールの歴史を、美しいイスタンブールの街並やモスクの写真をふんだんにまじえて紹介している。またオスマン帝国から共和国へいたる通史として、新井政美著『トルコ近現代史』（みすず書房 二〇〇一年）がある。

鈴木董編『暮らしがわかるアジア読本トルコ』（河出書房新社 二〇〇〇年）は、トルコという国の概要暮らし、社会、宗教と儀礼、現代文化、政治経済について五人の有識者が執筆している。また前トルコ大使である遠山敦子現文部科学大臣による『トルコ 世紀のはざま』（NHK出版 二〇〇一年）は、大使と

して赴任したトルコ社会がかかえる多様なジレンマや一九九九年イズミット大地震の際の日本政府の緊急援助等が、親日国トルコに対する深い愛着とともに語られている。

では、トルコがかかえるジレンマとは何か。第一次世界大戦で敗れたオスマン帝国は、西欧列強による領土の分割・領有の危機にあつたが、ケマル・アタテュルクのもとでこれを阻止し、一九二三年新たにトルコ共和国が建国された。この時以来、政教分離と「ライクリツキ（Laiklik）」と呼ばれる世俗主義を国是のひとつとしてきたが、アタテュルク亡き後、次第にイスラーム化が進み、二〇〇二年一月の総選挙では親イスラーム政党の公正発展党が単独政権を樹立したのは記憶に新しい。長場紘著『現代トルコのアイデンティティー——イスラーム化と世俗化のはざま』（東北大学「中東・中央アジア研究」シリーズNo.21 二〇〇二年）、澤江史子「新たなビジョンの探求——トルコの『イスラーム政党』の変遷」（『現代の中東』第二九号 二〇〇〇年七月）は、世俗主義とイスラーム化がせめぎあうトルコの現状とそのジレンマを取り上げている。また、トルコの長年の悲願ともいえるEU加盟を妨げる理由のひとつにあげられているクルド人問題について、小島剛一著『トルコのもう一つの顔』（中公新書 一九九一年）を挙げたい。言語・民族学者である著者が、警察や憲兵隊につかまりな

がらトルコではタブーだったクルド語の研究をとどめて提起するものに、民族問題というものがもつ根源的なむずかしさを再認識させられる。粕谷元「分化する『クルド・アレヴィー』アイデンティティ」（『現代の中東』第二八号 二〇〇〇年三月）は、その最後を「このような不定のクルド・アレヴィー・アイデンティティが今後とも『トルコ国民』というナショナル・アイデンティティの間に亀裂を生み出す最大の震源の一つ」と結ぶ。

最後に、世界三大料理のひとつといわれるトルコ料理にまつわる図書を紹介したい。細川直子著『トルコの幸せな食卓』（洋泉社 一九九九年）は、トルコの代表的な家庭料理を、暮らしのエピソードをまじえながら楽しく教えてくれる。『トルコ料理 東西交差路の食風景』（柴田書店 一九九二年）には「トルコ民族の歴史と食生活」といった記事のほか、食にかかわる写真が多く載せられている。くわえて、レシピが掲載されているのもうれしい。

今年二〇〇三年は日本におけるトルコ年とされ、種々のイベントも企画されていると聞く。これをきっかけに、さらに多くの人たちが、トルコについて関心と知識を持つてくださることを願つてやまない。

（はんだ まなみ／図書館逐次刊
行物課）